

早稲田大学大学院 創造理工学研究科

博士論文審査報告書

論 文 題 目

ル・コルビュジエの新芸術としての写真の解釈と
建築設計への反映

ル・コルビュジエにおける芸術思想の源流の一つとして

**Le Corbusier's interpretation of the photography as a new art
and its reflection in his architectural design**

One of the origin of Le Corbusier's aesthetics

申 請 者

白石 哲雄

Tetsuo SHIRAISHI

2021年2月

本研究は建築家ル・コルビュジエ Le Corbusier (1887-1965) の写真に着目した研究である。著者自身が写真家でもあり、これまでのル・コルビュジエ研究とは異なる写真家ウージェーヌ・アジェ Eugène Atget (1857-1927, 以下アジェと略記) との接点から考察するル・コルビュジエの写真に対する関心を述べている。本研究の過程において、これまで“*La Ville Radieuse*” (1935) の邦訳版とされてきた坂倉準三訳の『輝く都市』(1968) が実は“*Maniere de penser l'urbanisme*” 都市を考える方法 (1946) の邦訳であったことを解明し、改めて『輝ける都市』(2016) として邦訳・出版を行っている。

これまでにアジェの「古きパリ地誌シリーズ」を分析し、当時のパリの景観特性を考察した研究はあるが、本研究で扱うアジェの周囲のシュルレアリスト達の評価、またル・コルビュジエとの関連を述べた研究はない。ル・コルビュジエの写真に関してはこれまでにル・コルビュジエの書籍の中の写真に関する研究はあるものの、ル・コルビュジエ自身の写真に関する研究は行われていない。また既往のル・コルビュジエ研究の対象とされてこなかった《巡礼者の家》Maison des Pèlerins (1952-1955) を調査対象としていることにも研究の独自性が表れている。

本研究の目的は以下の3つに要約される。

- (1) ル・コルビュジエがアジェの写真を著書に引用したことを端緒として、シュルレアリストたちからのアジェの評価、特にル・コルビュジエからの評価を通してル・コルビュジエとアジェの共通点を明らかにする。
- (2) ル・コルビュジエが写真を彼の創作の中でどの様に捉え、どう扱ったかを明らかにする。
- (3) 《巡礼者の家》において写真を建築空間の要素の一つとして捉えていたことを検証する。加えて、ロンシャンの丘を構成する複数の建築群に込めた思想の一端を明らかにする。

本論文は序章, 本論3章, 結論で構成されている。各章の主旨は以下の通りである。

序章では、まず研究の背景と目的について述べ、既往研究を整理している。本研究ではル・コルビュジエとアジェの関連性を示した点、ル・コルビュジエの写真の分析を行った点、《巡礼者の家》内部の4枚の宗教画の原作の所在地を突き止めて再撮影したものを考察している点が極めて独創的である。その上でアジェ研究、ル・コルビュジエの写真や建築に関する研究などの既往の論点を整理して、本研究の位置づけを明確にしている。

第1章ではまず、アジェの写真を芸術として取り上げてきたシュルレアリスト達とル・コルビュジエの間に交友関係があったことを概観している。当時の芸術界におけるアジェの写真の評価を整理し、アジェの写真の所有・使用することの価値、芸術家達やル・コルビュジエとアジェとの接点の有無の検証、ル・コルビュジエがアジェの写真を用いる際のレイアウトや意味付けの検証を行い、以下の2点を明らかにしている。

- ・ル・コルビュジエは、当時アジェの写真を購入し高く評価していた芸術家たちと直接の接点があり、彼自身もアジェの写真の所有していた

- ・ル・コルビュジエは、1931年からアジェの写真を図版として使用しており、都市理念の一例として1939年まで使用し続けた

またこれらより、可能性として以下の2点を導いている。

- ・記録簿の記載〈Jeannuot〉より、アジェの存命中に写真を購入していたのはル・コルビュジエもしくはピエール・ジャンヌレと推察される。

- ・ル・コルビュジエがアジェを認識したのは1928年10月のブリュッセルの展覧会の時である。

第2章では、1936年から1938年（以下、後期）にル・コルビュジエが撮影した写真の中で、日時・場所が特定できた350枚を対象として分類・分析を行なっている。また1907年から1917年（以下、前期）に撮影した写真との比較を行い、それぞれの時期の写真がル・コルビュジエの芸術活動の中でどのように位置付けられるかを考察し、以下の3点を導いている。

- ・後期では人・動きに着目し時間を意識した写真が多く撮影されていた

- ・前後期の写真の変化は当時の写真思潮の影響を受けていた

- ・Siemens B 16mmを用いた後期の写真活動を、「カメラに記録を残すこと」を目的としたものではなく、動画用カメラを用いた新しい芸術の方法と見なしていた

第3章では、《巡礼者の家》の実測調査や、写真の情報整理・写真配置による空間分析、また一連の写真の再撮影・修復作業・実測から、以下の4点を導いている。

- ・《巡礼者の家》はル・コルビュジエが目指したロンシャンの丘の敷地全体の統合と調和の一端を担っていた

- ・両者の対比関係は、同時代の設計手法、東方への旅で得た幾何学や色彩観、またそれらが時代を経て建築空間への操作として随所に表出されていることから、ロンシャンの丘に存在する礼拝堂と巡礼者の家は、長年のル・コルビュジエの設計理念の延長に位置していた

- ・礼拝堂に来た信者達の宿泊施設である《巡礼者の家》には、キリストを巡る4枚の宗教画写真が設置されており、全て原画をトリミング・拡大印刷した写真として制作されていた

・写真フレームの仕様や配置は図面作成時において既に構想されていた結論として本研究の成果を以下のように述べている。

- (1) ル・コルビュジエはアジェの写真を自著に引用し、アジェのパリに対する都市像に共鳴していたことを明らかにした。
- (2) ル・コルビュジエは後期の写真を、動画用カメラによる新芸術の方法と見なしており、その撮影行為は時間性の導入をテーマとし、さらに建築における創作全般に時間性を付与する試みであったことを明らかにした。
- (3) これまで論考の対象とされてこなかった《巡礼者の家》を本研究において初めて実測し、またロンシャンの丘における礼拝堂との配置関係を分析した。さらに内部に配置されている4枚の宗教画においてもその原作の所在を明らかにした。ここでは写真そのものが建築空間を構成する要素として扱われ、写真配置を前提とした設計であることを明らかにした。

著者は、ル・コルビュジエの思考する建築空間において写真は重要な要素として捉えられ、その空間性がアジェの写真の構図と一致するとル・コルビュジエ自身が感じていた、と考察しており、今後の展望として、キュビズムの画家達が参考としたマレー Etienne-Jules Marey (1830-1904) の分解写真などの当時の写真思潮とル・コルビュジエとの関連性を解くこととしている。

以上を要するに、本研究はル・コルビュジエの写真に着目し、写真家アジェとル・コルビュジエの関係性の考察、ル・コルビュジエの動画用カメラを用いた写真の解釈とそれ以前との写真の比較分析、《巡礼者の家》の詳細な分析と内部に使用された写真の原作の所在地を解明し、原画との対照を行ったことはいずれも類例のないことで、高く評価できる。よって本研究は、建築学の発展に大きく寄与するものとして、博士（建築学）の学位授与に値するものと認める。

2021年2月

審査員

主査 早稲田大学教授 古谷 誠章 _____

副査 早稲田大学教授
博士（工学）（早稲田大学） 中谷 礼仁 _____

早稲田大学准教授
博士（工学）（東京大学） 渡邊 大志 _____